雪中菴嵐雪文集

911.3
ヒ

序

秋、ふるいろ

俳孫蓼太郎

序

秋、

[illegible]

[illegible]

俳孫蓼太郎[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安永三甲午初冬

雪中菴嵐雪文集

石子蓑太選

裝遊稿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安永三甲午初冬

雪中菴嵐雪文集

石子蓼太選

裝遊稿

[illegible]

芳孫より示しこし俳句稿見れば皇紀
貞享二年弥月上旬の文より始めて一編の
旅記とかけり扨ふしのよく似あれば
先達はものして有これ指南とせんの為
に柄山よりあてとい一編我らんの
菊葉はしこ第根路を尋ちもこれ
蹟より皆をきめて芦名の磐乃あれを
紀氏古の紙をもて陽らはて三路の尋
ねる旅人のたゆむけせる句をも
知るを百里氷死ハこてのさしふりの
さまをもその丑くの相結ひ紀氏
よりの川さくとして餞別の句も慈
さくうちやり小しこ旅て死ものこと
をなせり紀氏をいの先達のよれまるべて
孤を拾る松りひや死乃山
といこうり出しぬ車を推あり車をこく

あり彼も親しく見も不疎大道を門手
着有道

人家庭園花ある勢なり

糸ゆる日も　勅使の頃京より海を
海辺も菜を拂山も船しけふを晴と
ゆくろひ立ち右の篇を称上られるる
烏帽子の用意ちんときくと西行を
らくいまる変化なる井の宿人城

ある人を仕合なる縁り糸ひひ
宿主を見ぬ宿人もあん花の
大井河ちかく流因れ宿よりし出ぬ
拾の結りを世の中を用なるの手
思ひとりて宿人行るも戸を打て出
行る一日如毎よ流出る宿の何ひ
人を森して人を後中に行ぬ
廣を澄を人手散よ杜若

とろくと海底まで見えてきれいの新々たれ立て
いかにもうり鮫よりもそれ清く底まで見えて
うめく船中衆のおどろく事共孫石を仮手
いせの方を初てうりてたちくれ人々乃
命をうりなしは時生涯の深めるを思ふ
人々れ首よりけ紙を色めるこう孫を為を流
むるよりこの方へ一枚の一枚の八方を
紀角しくりのしるえるの八山少て古う

仰あとてそのを仮よるいこ深ふて
待りけるは源さんを吹をかをそを江源へ
出さそを清姫の方一流されけるむんを
人々をの世合うとく水を沙をむ
をひ大鮫をうくとおしもむ沖よを
よふ事日平けりを考るよ十里を仮
らんといふ衆立川をりて岩屋をり
警をかれ乃をとを伝義の中さかる

所なれたる川しく立ありて
蔵浦に船ハ繋りけりて湊
なかる二見の浦塩をたこふ日あかりとて内外の
神垣も殊に浮波おりしふりに山田ヶ原の新
松標のけしき尊かりけり
ちるらん松杉をうけゆきし
義仲寺の師父の廟にたちよりぬ芭蕉
破れて七とせ此露霜を送る石碑やうやく

若き人手向て
色としもなかりける秋の嵐
加茂の御蔭あふひの神事といひつたへけれは
日吉乃やしろは此頃の祭にて坂本の宿に泊ぬ
ころ来法とて法大焼家は隅に奥足とた刀の
娘よりしたまて傳りなるを持つてたる旅やはと
為けれども宮の前にかしこしかくかくりは無き
持ねは又傳へはしまけるも心なくかりけれは

かめくつ足這て出るや古具足

加茂の足掛と神人浄衣よさしぬきして

詰れたのしをためさる帳の屋よ花くさ紅葉を

さくめ赤うる黒うるを見のてるこくうを唯

黒白うるくるよ見わの浪

落ちぬこうよ目立やの掛

大日のくるくるて変ふうひ芝生を辞る

うつれ名残も言うは出うり

あやめ草加茂れうり格今爰日

大日ち今文殿七日よりお猿原れ出ち

当日小川を南一神輿を渡しまる十八日

まくく和文て清川

埋火を原とのよく和的れ

一種賞玩ようく岩川中よ清りう待て

味噌摺て原な鮒の酒う肴

伏見ふく

ゆくのくるまよ伏見や葵の月

祇松ふりくる雨を月も宴りとの古風

なるべし

沙地てまる夜遊る秋の月五

祇園会七日の詳十四日山鉾巡り御幸

見るのなるハ萩出いるべし　松尾まつりむ

素袍よ古カるさるに象る金の過よ庶を

居まて下の紐を結ぶ　さ法ゆてくまるの

房ふけ多る鉾持ついてかちんのよ下を

る男等黒漆の烏帽子を持て粽をつ

ちひ非常をいはむ為くるられを

一二の園を改つへを威儀厳重なる中ゆ階

ふと白と車よつくる町こに引を伝れ

用ゆ持り乙

をて白もゆ踊や祇園の令

加くれ涼

まるあれゆく水流に涼しかる
子なを南へ四塚のかなたへ行きて
洛東のかも清水や藍そそげ
京より唐崎へ行きて志賀越し山越ハ
ちかなと
志賀越とあり比叡や菊の花
七夕
七夕や加茂川ちかく牛車

花月井雅波屋の蹴鞠池の坊の立花拾乃
四文いかれ風流立てるあるを
ひろう
秋風のうしろをのぞく立葵
九日の古乃糸小枝の笠は冥途よかるる
ちらりとて洛中の寺院まうて桂の葉
めく魂をむすぶ
歩を留く拾ひ

ちゝハ家より盃をむこ人にとらせ
さ一條く京〳〵といひける様より四條殿
ゟ[illegible]いこゝろみ白くさかりとおりひよ
ゟ[illegible]ゟ彼ハ[illegible]そひゝの果ゟ二十
年来みしものゝ[illegible]ゟ罪さんけ
しくゟけさるゟゝゟ[illegible]ゟ人ゟ見え
させて公家といふものを[illegible]称ゟ[illegible]
首あり[illegible]人ゟ名のゟき時ゟいゟ[illegible]

いゟをゟ国[illegible]同来たゟゟ年をゟたて
宮〳〵ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]称ゟ[illegible]ゟ[illegible]止
さりけゟて文戒せさ[illegible]て吉山浄白と改名
ゟて[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]帰せんもんやゟ[illegible]
別ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
ゟせゟゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

ちゝハ家よ金をむこ人をちさりのこゝろ
さ一ゝ深く京一くゝといひる移よ四臨城
見るこゝろこゝみ多白ゝきふりゝおりひを
多ゝ多ゝ彼ハ行そひゝの果ゝ二十
年来みゝ一ゝのこゝよものれ羅さんけ
ゝゝゝけさりるゝゝゝあゝ見るこよ見え
さゝて公来ゝいふゝものを称ゝりゝ行ゝ
首ありゝんこよ名のゝゝ時ゝいゝ時ゝ

いふをゝを国次同来たゝゝ年をゝたて
実ゝゝ見ゝ若ゝれゝいふゝき新ゝゝ行
如称ゝりゝ尼よゝゝき至ますゝ止
さりけゝて文戒せゝ勢て吉山浄白ゝ陸
ゝて改ゝ至くゝ成ぬ実よ食一かゝる
行師せんゝやゝゝて妃あゝ至居宝

うけに行きうふを行とあくおりひ出て
きやうりきやうきやうをいふをの調和と
心の魂むしくく

魂祭こゝこの祝ひの松かり

十六日八山くの送り火如意嶽の大文字松
崎の妙法河原まつ麻くまつ大文字
魂おくりし待りぬ

強を焼火のうるや秋の風

大文字の句をもとめたまへる人の出る
ゆゑよ

山の端を言ふも思ふや大文字

里右の嫁うしろひうるよ法うそて

晨灯のうすまつ法ふを歌ふ

社の文字糸

嵯峨中の秋しさくる落葉

いくさよ神をひられて其日をくらしたる

ちまたよ風をきくてハ二夜と明るなれの
家北株もあるかなへぬ
洛外の辻堂いらか秋の風
坂言
渡る月をまちるよ明るり秋の風
海雲方丈へ行脚のいとまを申入る時途
中文用北一句を同る陸奥言中ゆしてる
牛歩もかへらぬと名残をしてをしまれ乃
秋の海
地よ森るる牛の思ふ秋の月
師問云去春望別送乙片語今秋帰来
相見了也即今如何是行脚眼某答云
觀音境裡古窠樹師云窠無古今色
作麼生無古今色的一句某進云春色
無高下花枝自短長師領之休去某
拜退参堂去

信濃記

山野よりかけり温泉あり元亨の比氣血枯
屋しるるあり年三四の間に浴光線流あ
日毎に松ふ寺の眺を斜なるに依て東の山
ふもとを左右より鋒かくれて蒼天線見
越は士峯遥あ稲ふ色多り松森は鬱深
沢の流猪を洗ぬさ玉をまろばすて
心を補ひ眼をいさ海むるの温泉を
和住境は助ふ所なりこの所を大うる
ものに伝作をくき夫場なり書八早雲
瑞岳和尚の述紀ふして紙上蛇を花さ法
麦を塔の沢と中侍の阿育王八万四千は
宝塔を作りて滅後の佛舎利を納なり
四天下あ分布し給ひ多るこの世日のりを
山るる七ケ所は寺ひ川ことて塔は峯を
禁ふり十八町の険沮を究尽て厚葉葉乃

一字は法堂にあり阿育王山と云ふ阿弥陀
寺の四字は支那南源老師の筆跡中興開
基草堂上人と字一し擅化は人なしく
義存ひし岩窟の跡を特更に至云ふ町
半山上にて樵夫も尋ひるに紀行迫まあり
ものとかまり居て強み人なるに依
迂化ありしとの衆人の根氣もおそ絶へ
ずして今は菴も山の半腹に吹おろされたと
近なる窟とおもり窟影ひ毎ふ〳〵きるにあり
又東の沢といふの沢せ江城より流れ湯を
けるに塔は字少の塔にあり東の字に出者
ら是を後東塔通用しく出来るとと
彼の法院寺に遊登りて院中小く多大なる
用意しく拙くくいたるに入れ後にあり
くくし記に茶といふる仙茶も仙を待り
とく名りとも

燕北加一里百餘間北面
山湯の世上無比なる事明らかなる事六十年
前寛永北法師ありて寺院初めて建立北入
口より熊野権現の小社あり往昔より此地に遷
宮しくるこの甚だしめを知人なし昔所
風祭の因文彼地の栄をこうむる為流宣しく示現
ありたしけるこの法師しきお事和
ありて名湯ありと告げたりしに人

いまだ伝聞せざりしに年ありて小田原より
一家をうけし居住しに是を慕ひ牧場乃
おそれ多くおとしたるこの湯新きやうに
陳をなす毎今北一の湯小川宗五郎今宗泉村岡の湯これ
遠日うしやを集るこの外に謂上湯元湯
背戸の湯流の湯加うるに北中名之玉北法乃
流の湯八を年かれ出うしうして中結来
洋中無法民の大守稲葉の浦家人水野氏

行の素女是不仁の甚だしく世湯を求めて
取てより此神女十二人の容儀出向て答
されば病を治す霊験金瓶の茶師十二神の
擁護をなして法病悉除此誓むかしより法
験なりとて撒下(云々)赤飯一器破湯
二椀をよせて出ふる其時此使者
今此宗益なり存命まして九十有餘横槍
をかけて健ゆて大力を此翁なりこの宗仏

神の不思議なりなるべしとて
まうちのうちひ是ハかりむし刺よ山路ハ
さて是夜を限つて梓の雲ハ仏源を弱ぬ
行方をたつぬ樹を知る者うれ
何所ハ出く二百十日の波をおとろく貝吹
あるいは猛小屋も目かまぬものうち心苔ぬ
水言も新さひ者りかの山里を
堂ら湯宗の下座舎木香芋の湯を弱く

地獄ばりといふものあり佛湯藍のあるを
縛屋地獄といひ鋏鉞の責するを鋏屋地
獄といふ寒冰山法地獄寒冰地獄などよりも
百倍のものの精苦を受るの苦ふりえ堪こうをこそ
盤石程しなきなく佛名をとなへ男のさまも
新たなることをいふ一けを思ひて山色の混化
情の顔色をあらたるこのこと
色さへ鏡影の似るなるよきりくを

湯本の雲寺八小田原小条氏代の菩提所
古墳あり佛くくと並べ立て祖新九郎
氏義八永正十六年七月十四日
逝去申しとうや今早雲寺殿塔を大
きて苦を制のあるを名を移む
雲寺名は雲寺を記
宗祇の廟
石塔を拾て墓やすむ一系式

長興山の流れ見るまゝにて梅花径をくだりて
白雲関を見て三吉蛇白象九奇石の名を流ハ
三筋に落ちて流のまゝに川瀬と号く水の
落を小潭とよぶ象九物に多くて紅九
流れ江にかゝりを分てうつくしき海面
小田原の海と云川に船く東西九里南北
のとゝまる奇くるまいとあやしく海に
せまるむつれくに新宿とゆいひてかゝる

原を行くと実ぬ会津原に出て
此時白雪三面の見ちまく山原にて
ありぬ九て親しき限りにて酒造り川
石さく重ねて見る面小田原より峠を
見て見ぬ会津原にかゝりぬ

神籠小ちつ見ぬ会や奇時面
ことゝも名所八幡宮大仏ちくるる
時春を南を行ちり仏頂珠

胡蝶記

蜀山庵冷し姑蘇竹豊孤松空しく老ぬ
高田城魂を傷ませ赤壁の鶴の羽影
かんこうるしいつるの時めきて面をうつ
ゆるる厨遣いこの古の園屋をうつ紙
孔く貴て雪のまいるや故宅推めて
かうきて拓くるる人あるし
一本落ちいつるも推り根むゆうさの菊

器物といふ家は一房植ゆせ一花の家は
上簾は但ら去やむ〳〵うり南窓み
庵あるけ主とも宮垂をうく繞るひ
仮白家粧をれとも粉黛かし面ちうち
財命を濡く板の板戸は沈るよ其人の号
かをうり菊はいろく去ましるる

絵の菊みを知も像ら仏故壊式
程山星は家を表て義ち面白や格ら

[illegible]

[illegible]

胡桃を砕く鳥の嘴梨を絞る村雨声窓

山宅の緑さ深さを[illegible]

風[illegible]梢に秋はうつれる

風樓の雲山を見るとき雲山画屏紙

[illegible]

源氏の美蓮をうらやむも探蓮の海めやこの

なる事もありけるを流転身をみこしく

新をいとなみ給ふ

蓮の骨衰を美女乃尸うれ

百士ちりをつる屋形蹲境を分を蓮れ示

薄れ巻と朱身を[illegible]家旭新塔を[illegible]れ

主ちさ大勢ひつる[illegible]人れ裾を[illegible]

[illegible]

あらしをいとふやかしの年うゐ月は時雨
しつゝ泉生山若草は山代水もえのこるを
汲たるあり いなとて田苗や稲葉は枯はて
くやしかるらしめをとりぬ民ゝ
若草は徒面小めてゝ騎屐のをとゝいはゝの
ちく貪村みゝひ竈を数をかゝ月は山を
惺木の紅はあをひ面より後の春は嘯く
枯大和は風信詞を稚まくは信ぜりみ賀

茅舎と胡ふり風流りぬ
雪もを年の若葉をこやゝ橋小あゝぬ
指まく春は笑を第小後屋も紅の蓮蓋
山年を見捨る東路や上世の紅乃言吹八重
ゝ原貝の言中の蓮橋をゝゝゝ枯ん
とおりふんはたんをうる弟もあしせた
面ゝぬ新かこ月下旬神後を他のしら
雲と泳をゝぬ

乱をとる辯

ちゝを身に毛いとゝもゝ襟のかとうさし
はるこの飯粒のゆしゝ虫抱はすりあてゝり
疾く殺しゝもゝ眼境二ゝよ寄ゝく渠ゝ女
就霰ひゝゝみ白ゝ肉ゝき腸咽吸ふゝて
動揺く眼きゝくゝとゝすゝゝゝ宮ゝ六ゝ
ありゝおゝろしけるゝ護摩堂ゝ法
まゝ昭王ゝ似ゝ虎ゝたゝひ就ゝ

年ゝ二ゝ諭や必死の人ゝ家ゝ人ゝ
産ゝあゝもゝふゝもゝおゝ本ゝ人ゝ
たゝいゝゝ死ゝきふゝ鹿ゝむけゝゆく
おゝろしゝとゝれゝおゝさゝ見ゝれ已この
姿ゝ死ゝゝ出ゝゝゝゝ初ゝ唄ゝ
ゝぬ声のかけゝゝ今ゝ身ゝ
加ゝ結ゝ育ゝふゝまひゝゝゝ
義ゝ年ゝ重ゝたゝ器ゝ人ゝ彩ゝ

うしろて果らぬ修業生れかとこそ拙き
臭穢の中に質を稟て褌に滞り縫目より
かくれて人の血氣を犯し吸ことは蚊に続
半を嗤より類なし其生涯乃終ある所ハ
大きくハ中に細き烟とさひ木枕の角より
かくる所をしらさし遁れぬされて其如乃
性のことなるや摩謁なりといへる魚の
大百虫句より蝨蟆の微細なるまてゆき

まゝ見て憐悲こそいかはかりなしとこそ覚え
内裏にその化物ある心しまの紙灯の光に
一夜志らくて拾り遁さ湯にその化のかの沿り
けるとそて知識の肌に別なしひて徒を問う
いそれかりなききへき因縁にや柱の穴に生ば
たくりくて旧年の悪人にハ類なしともさ川
いふ事ありしてんとかさなる心ねくもの捨とあり
志こくまゝいかも思ふ事にせるなく空

古給けて見えぬ後ニ八ゆるし侍るハと經て
あなかくて栽進とかし渕よ拘居せし人の
許してふ手あきてう゛菱ち志ゞらみ小
志る志のゝめは宮ゟ志るしてぬ白芳
坊ゟ夜被しるのゝ
蕪ハ苑あとは綴ゆくひなか

若菜の序　廻錄一回忌之集也

きの卯義仲寺は於集ゟ卯十月十二日

玄々ありかしとよなし哀死侍ハ服よこゝ上
余情を筆丹称く傳を今ゟえる人のおもひ
出菓なゟんし此ゟさ咲小ほふ秋のい後く
むしの意は耳よ似みゟゝりもすと終よ
こゝろしの侍くしきてとゆく主なし
本心の翁門人且ゟ道へいゟ称る邑鄉諸の
主人公

式時序

花に対して信かんを起こすべしん
白を見ては一花毎回を起こす事
あり姿八重れたるこゝしとある
ときを

児筆序

多松八川も星かちに秋分を起して藤を
麻せた旭さす多新今やと結ぶ魯山乃
凡中に指はしまて百里の雲井父よくと
以親も親ちまてさて思ふんをそ毎も
結新なり

筆とは八枝やしを児桜

右の児に桃筆させて為るまとる門人
大魚図牛法岩八医免図光瀬結役の一無
あり附れとしてを去

其袋序

ちあんをとして天の袋あり行ある色

入物なりしかばそのころいよ母の称なり
等ゝ[illegible]あるべしとゝ父よ追ひて怖しき
ゝ[illegible]袋のかゝきめ見しもいつよりすれて
底かし袋ばかりもむすびそなりそられよ
たる嘘袋ハ清浦の名ゝ[illegible]ふよハあゝ[illegible]
我そつきありきぬ袋ハ[illegible]書袋ハ[illegible]
火袋なり首よ鉦ゝ[illegible]ふゝろよいゝ[illegible]
入ゝそ結の袋とゝや春山ゝ[illegible]身ハ[illegible]

囊よりおりし所の袋ハ[illegible]
袋そ[illegible]おもゝりけむる憲ゝ袋紙
かゝゝむとゝそ[illegible]ゝそりてむつし
ゝよ甚ふゝろや花の[illegible]ゝ[illegible]身の欠
ある[illegible]ゝ[illegible]あ[illegible]めて我家ハ秘[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
元禄三年かのゝ年ハ[illegible]

吊翁辞

いつれなる風のうしろむきなる者の墓の
おりて見し秋のうきよのうき杖よさあ
ばこそ稀なる小義を病つゝ浮世を離れ
ぬしく枯野をたのみ給へひし一句を
そえのうつ墨かしぬ其角さはちきり
みてや生おれ對面坂の中を納法久
うきを紀境の人こそいまさらに及さはや

江戸にてうきをしるせる俳人を追善
席をかゝゝて追善興行れくさく神よ稼
ぶひうきぬて仕よ歩を忘富士も見た
大井も忘ぬ家々かゝて最身七日先
やかたくよのほゝよ義仲寺の塚よ忘さ
まいく空花散し水月うちうほてゝ紀
心境一芸を忘さまて万象よく移る世師
この乃て於く自を利し他を利て弥み

[illegible]不渇今を見給へとも学たまへとて
はやうかく賤[illegible]ん[illegible]言佛

義仲を学ぶ辭

みれむしの[illegible]芭蕉

いて学ぶまかりん行程二十町をそやこの[illegible]
[illegible]やさすきさしやは法[illegible]もあるし
[illegible]なるもたのしおりろや格ハ
[illegible]入江の鵜舟[illegible]

[illegible]ぬ警[illegible]かりあかうれ川
[illegible]いてら未[illegible]む川隈[illegible]
[illegible]ちう[illegible]京[illegible]を奪ひあ[illegible]
[illegible]家門の[illegible]衣の襟[illegible]
[illegible]
[illegible]たまひ[illegible]入てられて義
仲の声明[illegible]
[illegible]

ちりもと論すれハ風雅ほつよしふもあ
雅ある所さなし このミそれ古けれハなか
也へみそこの花声にて寒平の姓のさハりしきかハ
なよ意しともまへにまへさまあし
みるるみふもなけんの色の情と閑人の栄と
ほし笑はすへき事なるへし其ヨ翁れ
かしましこのるむ呼そ
何も事もなし稲妻吟て参るか　嵐雪

唐の坂讃

唐坂く詩人を吟つゝ肥て桃のこし
からの数く美人の姓よこり色喬て渡る
柳よ綱より

唐坂や詩にも枯る宿坂草

右一章ハ露様先生の許まて唐紙に
坂の源へとるとて句を乞けるよし今また
いせ坂何りし又東武にも持行ふとて

昭和學園
短大
第 6507 號
受入
昭 36. 3. 14